

なつたが、その後も働き続け、六十三年に辞めた。

昭和六十年に、安東市訪問を主とする旅行団の一人として、安東、奉天、大連などを訪ねた。その後も機会を得ては中国を訪問し現在まで八回になる。

今は、よい経験だったと思つている。そして幾度か残酷な場に遭遇したり無情な思いを味わつたりしたが、すべて戦争がもたらした災禍であると思つている。

世界から戦争という愚を無くして、永久平和の来る日が一日も早いことを願っている。

## 敗戦国難民の記

京都府 天 沼 明 子

はじめに

ソ連軍が突如ソ満国境を越境、満州に侵入した時、

関東軍関係家族にはいち早く避難命令が出されたので、私たちは北朝鮮平壤に向かいました。しかし、四日目に終戦となり、約一年間敗戦国難民として、そこで過ごしました。

北朝鮮独立記念日までに平壤を脱出すべく、数人のグループで徒歩にて、公道は歩くことができないので、山、河を越え、十日かけて三十八度線を越え、韓国の開城にやつとの思いでたどり着きました。米軍難民收容キャンプに入り、二日後、釜山港に貨車で運ばれ、米軍艦リバティ号にて博多に到着。敗戦国民の旅は終わりました。

あれから五十余年、年月の流れは早いもので、通り過ぎた地名、踏破距離は今も忘却の彼方へと去り、わずかに残る記憶の糸を手繰りながら、当時のことを記してみたいと思います。

渡満

父は現東大医学部皮膚科医師として診療、研究に携わっておりましたが、旧満州奉天南満医学堂からの要請により、一家九人とお手伝い二人と共に奉天の地に

移住しました。

当時私は生後十カ月、それから終戦までの二十年間をこの地を生まれ故郷として過ごしました。

### 奉天での教育

幼稚園、小学校は忠霊塔の東側にある、教育専門学校附属校女子組で六年間、同じ担任の先生で過ごしました。

教育専門学校は、ユニークな教師を育てる学校で、型にはめず自由のびのびと私たちを育ててくれました。

女学校は満州で一番古い歴史を持つ、奉天浪速高等女学校でした。赤煉瓦の三階建てのスマートな校舎で、憧れの学校であり、そこで学ぶことに誇りをもっていました。寮も完備され満州各地より集まり、中国、朝鮮の人とも机を並べました。

### 家族のこと

父は満州の医療開発と、医学の発展の礎となる決意で、この道を選び、奉天に永住する覚悟で来ました。医大での教育、診療のかたわら、奥地の風土病の研

究、対策、診療活動にも精力的に行動しました。そのため、留守も多く、常に研究のため帰宅も遅く、私たち子供たちとはすれ違いの日々でしたが、尺八部、乗馬部、ライダー部の顧問をしておりましたので、お休みの日に見学に連れていってもらうのが楽しみでした。

母は耳が不自由でしたが、補聴器をつけ、明るく優しく、女学校時代から学んだ日本画の制作に励んでおりました。

三人の兄は東大、満大、東北大の医学部に進み、父と同じ道を歩みました。

姉は女学校卒業後、東京香川栄養学園へと進み、栄養士の道を選びました。

祖母は人の世話、特に兵隊さんの世話に力を入れ、「兵隊婆さん」とも言われておりました。

叔母は編物、刺繍が上手でした。

私は末っ子としてのびのびと育ち、女学校卒業後上京。東京実践女子専門学校家政科に学び、卒業帰国後、母校に家事科教員として勤務しました。

## 満州事変

昭和六年九月十八日未明、関東軍よりの一発の銃声からそれは起こりました。

「今、奉天郊外北大営、東北飛行場の中国軍と交戦状態に入ったので、いつでも避難できるよう準備してください」と、満大の伝令の方の言葉。父は留守、私は訳も分からず、言われるままに服に着替え布団にもぐりこみました。時々「ドスン」「ビリビリ」と不気味な音が響くので、母にしがみついております。何でも東北飛行場を攻撃していた大砲の音とか。

夜が明け、外に出た兄が、町の隅々に鉄条網が張られ、剣付鉄砲の兵隊さんが大勢立っているのを見ました。三日後に北大営に運ばれて行きましたが、その時はまだあちこちに死体が転がっております。

昭和七年三月一日満州は独立して、満州国が建国されました。新天地を求め内地より大勢の人が来ました。中には日本人を笠に着た、心ない人たちが満州人を騙したり、理由もなく暴行したり、目や耳を覆いたくることが多々ありました。長年平和に育ってきた

大切な町奉天を荒らされることに、情けなさと、憤りを感じました。

## 戦争の足音

平穏な日々の裏側では、関東軍の上層部の人たちが徐々に野望を出しはじめ、ついに蘆溝橋事件から日中戦争へ、そして満ソ国境でのノモンハン事件へと戦争の深みに入り込んでいきました。

女学校三年の頃から、白衣縫い、白衣帯縫い、軍手の補修という仕事が入り、教室が工場のようになりました。

体育教員にも軍の将校が配属され、救護法、防毒マスク使用法など軍の人が直接指導にあたり、分列行進、閲兵などの軍事教練も受けさせられました。また、軍人勅諭の暗唱、全満で真先にズボンを制服として着用など、だんだんと戦時色に染まっていきました。

昭和十七年四月、東京実践女子専門学校に入學しましたが、勉強らしい勉強もなく、軍兵器補給廠、キンカン工場等に勤労働員で行きました。その頃はまだ、

本土への空襲もなく戦勝に沸いていましたが、食糧は配給制になり、外食券が無ければ米飯は食べられず、我慢の日々でした。

雨の中の学徒出陣壮行会は、あの頃の忘れられない思い出です。

三年間が、二年半の戦時中短縮教育となり、昭和十九年卒業。幸い徹夜をして切符が手に入り、無事奉天に帰って来ることができました。

奉天に戻った直後から、内地の空襲が始まり、激しさを増し、十月から母校に勤めましたが、ほとんど勤労員で、鉄西の酒造会社で無水飯（お米を蒸し乾燥させたもので、食する時には水または湯でもどしてご飯にする）を一食分ずつ袋詰めにして、それを百食分箱詰めにする作業の引率、指導に従事しました。楽しみだったのは昼食に「かす汁」の給食があることでした。

思いがけないことに、慰問でヴァイオリンの辻久子さんが来られ、チゴイネルワイゼン、その他数曲を聴かせてくださり、感動したことが今も胸の奥深くに残

っております。

昭和二十年二月、母校が火事となり、赤煉瓦の校舎は無残な廃墟と化してしまいました。

奉天にも二回、B29の空襲があり、軍施設、軍需工場、そして市内と、満州にもついに戦火がおよんできた、と覚悟をせねばなりませんでした。

#### 結婚そして避難生活

昭和二十年五月十日、縁あって、奉天郊外の北陵にある、旧東北大学跡の関東軍通信教育隊勤務の陸士五十一期陸軍少佐と、姉夫婦の世話で見合いをし、二カ月で結婚。長年住み慣れた我が家を出て、部隊近くの官舎に住みました。

毎日、馬で出勤、帰宅。家の周りで、当番兵の方が丹念に耕し栽培してくださった十種以上の野菜と五羽の鶏の世話をし、満ち足りた日々を過ごし、内地が空襲の激しさを増す中、平穏な日々を送っていました。

しかし、そんな日も長くは続かず、八月九日未明、ソ連軍は一方的に日ソ不可侵条約を破棄して、戦車部隊が突如侵入してきました。

「当分帰宅できないと思う。何かの時には伝令を出すから、軍用行李の中を調べて用意しておいて欲しい」と、言い残して行きました。

十四年前の満州事変勃発当日の記憶がよみがえり、不安な一日を送りました。実家に電話することもなく、先行きに心痛め、軍人の妻としてこのような時にはどうすべきか、などと思いをめぐらせ、空襲警報があっても外の防空壕には行かずに家の中におりました。

翌早朝、父が心配して馬で駆けつけてくれました。今までの張り詰めた力が体の中から抜け落ち、言葉もなく涙あるのみでした。

「今夜は何事もなければ帰宅されます」。伝令の方の知らせで、お風呂を沸かし、夕食の準備に張り切りました。帰宅した夫は「明日、別動隊の隊長として出勤する。実家に帰してやりたいが、上に立つ者の妻として部隊の家族と行動を共にして欲しい。部隊長が七月に赴任してこられたばかりなので、万が一の時はご家族のお世話を頼む」と、妊娠二カ月目に入った私の

体を心配しながら言いました。そして最後に、「どんなことがあっても、生まれてくる子供と共に強く生きぬいて欲しい。生きてさえいればまた会うことができると言おう」と言うと、いつものように馬にゆられて出勤して行きました。

午前九時頃「家族に避難命令が出た。十一時頃トラックが迎えに行くので準備をして待っているように。二度と会えなくなるかもしれないが、生還めざしてがんばろう。冷静に行動して短気を起こさぬように。僅か三カ月の生活だったがありがとう。楽しかった」という内容の手紙を、伝令の方が持って来られました。荷物をまとめ思案していた時に、また父が心配して来てくれたので事情を話し、貴重品を預け、後事を託しました。

平壤へ

奉天駅はごった返しており、長年住み慣れ、育んできた地を離れてゆく淋しさや感傷に浸る間もなく、列車は一路南下し、鴨緑江を渡り平壤へと向かいました。

平壤で下車し、すでに新京方面から乗っていた家族たちと中学校校庭に集結しました。そして、落ち着き先を割り当てられ、私たち将校の家族は「二四四部隊」官舎となりましたが、すでに空き家となっており驚きました。引率の大尉さんと二人の兵隊さんは「私たちの任務はこれで終わりです。急ぎ帰隊しなければなりません」と女、子供を残して奉天に戻って行かれました。翌日、部隊長夫人と朝鮮人軍属を引率して来たK軍曹が残り、面倒を見てくれることになりました。

#### 終戦そして敗戦国難民

昭和二十年八月十五日、ついに神国日本は敗れました。「どうも日本は降伏したようだ、戦争に負けたのだ」「まさか」「聞き取れなかったが、大皇陛下のお言葉があったそうだ」

間もなく連絡により、日本が無条件降伏したことを知り、それでも半信半疑で、頭の中は真っ白、呆然としてお互いに顔を見合わせるばかりでした。「日本が負けた。そんな馬鹿なことがあってなるものか」。で

も戦局は日々不利になり、東京、大阪は激しい空襲で焦土と化し、広島、長崎に新型爆弾が投下され、両市は全滅、と耳に入ってきたこともあり、「やっぱり」と今更ながら無謀な太平洋戦争を引き起こした人々を恨みました。

そんな時、軍医で召集された叔父が訪ねて来て、ひよんなことから私が平壤にいたことが分かったとかで「この先どうなるか分からないが、万が一奉天に帰れるようなら迎えに来るから」と食糧品と現金を置いていってくれました。

私は何と幸せ者、運に恵まれているのだろう。精神的に動揺している時の先の二度の父の訪問、また今回の思いがけない叔父の出現に、励まし勇気づけられ、神仏の加護に感謝し幸せを感じました。また、これから遭遇するであろう幾多の困難にも打ち勝って、生まれてくる子供のためにも必ず日本に帰るのだと固く決心しましたが、その一方で別動隊で出立した主人や、両親、家族たちはどうしているかと、思いは奉天の空に飛びました。

翌朝、K軍曹が、前もって分散させられた部隊家族を安全な市内繁華街、大同門近くの華頂寺に全員集結させてくれました。新京の兵器補給廠の家族と共に百人近くが二階大広間で敗戦国難民として、先のわからない生活に入りました。

当初は朝晩二回、かぼちゃ、さつまいも等の炊き込みご飯のおにぎりが支給されましたが、食糧事情が悪化し、水のような野菜ばかりが目立つおかゆとなりました。敗戦国民なのだから、屋根のある所で寝られて、食べられるだけでもありがたいと思わねばと自分に言いきかせていました。

奉天出発時に多少持参した缶詰、お菓子で飢えをしのぎましたが、それも底をつき、空腹を訴える幼い子供たちを我慢させるのに、大人たちは自分の空腹を顧みずに、子供たちに与えました。

子供たちの体力は次第に衰えはじめ、十歳以下の幼児子供は栄養失調に陥りました。平壤の冬は早く、はしか、百日咳、肺炎がたちまちはやり、次々と命を奪ってゆき、一日に三、四人は泣き悲しむ大人たちに別

れを告げ、あの世へと淋しく旅立ってゆきました。

新京兵器補給廠の方たちは男性も多く、私たちはK軍曹を除くと女・子供ばかりでしたが、お互いに助け合ってトラブルもなく過ごしました。

そんなある日、一カ月分の給料が支給されました。

満州国のお金でしたので使用できないと話をしていたが、現金を手にして全員大喜びしていたところ、K軍曹が公安局に連行されました。二日目に、顔は紫色にはれあがり変形、体は打撲を受け血だらけの無惨な姿で運ばれて帰ってきました。華頂寺住職の取りなしで帰ってこれた由。何でも密告によるもので、支給した給料のお金の出所を厳しく糾明、拷問を受けたとのことで、せっかく支給された給料は没収。万が一隠していることが分かったら本人のみならず全員同罪との厳しい通達。敗戦国民の屈辱と悲哀を味わいました。

ソ連軍、それも囚人部隊が進駐して来るので、特に女性は注意するように（朝鮮人女性も同じ）窓に畳を立てかけ内部を見えないようにし、しばらくは生きた

心地のない日を過ごしました。

やがて正規軍が進駐し、幾分、治安も回復しましたが、華頂寺の一階は朝鮮人青年団の事務所になっており、トイレは共同使用でしたので、夜間、昼間でも朝鮮人が手引きをして、用を足しに来る女性を襲うということがしばしばでした。そこで自衛策として絶対一人で行かず四、五人で行く、大きな声を出す、また公安局に強硬に申し入れをし断固たる処罰をしてもらう等、これまた敗戦国難民の弱さを味わいました。

女性が多いということで「ダワイ」をかけてきましたが、そのたびに商売をしていた人が犠牲となって助けてくれました。

昼間、二階にまでソ連兵が上がり込み、ナイフを畳に突き刺し、物を要求、特に時計を要求し一人で両腕に何個もの時計を巻き付け見せびらかしては脅されましたが、ソ連軍の憲兵 G P U に通知するとすぐに出動して、引き立ててゆきました。

ソ連軍が進駐してきてからは、男性は使役に駆り出されましたが、黒パンを支給され、私たちに分けてく

れました。私は日本人避難民団の事務所に勤務させてもらいましたので、時々黒パン等いただき、みなさんや生き残った子供たちにあげました。死亡者が出る公安局に届けを出し、はじめは火葬許可を出しましたが、朝鮮は埋葬なので埋葬することとなりました。許可届けを出しに行く仕事も、往復時に通る町内も、全くというほど危険は感じませんでした。避難時に持参した衣類をお金に換えて、市場で買い物をすることもできるようになりました。

お寺の「キムチ」が盗まれたと疑いをかけられたりしましたが、後で関係ないことが分かり朝鮮人住職が謝りにきました。

夜は電灯のもとで、肌着や毛髪のしらみ取りです。大人たちの間にもしらみの媒介による「発疹熱」が大流行し、症状の重い人は郊外の伝染病病院に隔離され、K軍曹はじめ部隊家族半数ぐらいが入院させられました。私も妊娠していたので大事をとって入院させられましたが、病室の真ん中にダルマストープがあり、お寺での生活よりは寒さがしのげました。それ

を囲むように五人一部屋で、治療というほどのこともなく安静あるのみで、食事も二回白米のおかゆ、たくあん三切、ししゃもの焼いた物と恵まれていました。

熱にうかされ、寝台と壁の間から、主人が縛られて出てきたり、両親、家族が次々に現れたり、K軍曹が「隊長がヘリコプターで迎えにこられ、奥さんを是非連れて帰ってくれと言われていますから早く行きましょう」と言う夢を見て、高熱の体を起こして叫んだりしました。

数日後、部隊から迎えが来たと大喜びで廊下に出たところ「貴女は妊娠しているので残りなさい」と言われ病室に戻り大泣きに泣いたことを覚えています。K軍曹も残されました。

またある日「教授からお嬢さんを迎えに行ってくれと頼まれ高額のお金を頂いたので帰りましょう」と言う人が現れましたが、これもドクターストップがかかり、それに無事に奉天に戻れるか身の安全も確認できないため断りました。

今から思うと、妊娠していたことが幸いだったかも

しれません。日本に帰ってから聞いたのですが、先の人たちは安東で長期間貸車生活をさせられ、奉天には帰りつくことができなかつたそうです。

トイレは病室から離れており、寒さは外と同じようなもので便漕から氷の柱がたち、用便もままなりませんでした。

一カ月ぐらいいして華頂寺に戻ってみると、部隊の家族は半数以下になっており、中には部隊長家族に意地悪をする人がいましたが、そのうちみんなから無視され孤立していきました。

昭和二十一年三月十四日男児を無事出産。初めてのことであり心配でしたが、上手な産婆経験者がいて、また胎児も小さかったので安産でした。「今日からは独りではない、この子と二人で生きて日本に帰るのだ」と思いました。食べ物が食べ物だけに母乳の出は悪く、左乳房乳腺炎になり、この世に生まれ出ると同時にひもじい思いをさせてしまいました。

朝晩のおかゆの上澄みを朝鮮飴で甘味をつけて飲ませたり、沖繩の方のお乳を分けていただいたり、必死

でした。

五月頃に大同江対岸の鮮鉄社宅跡に移動を命じられました。荒れ果てた社宅に一步足を踏み入れた途端に、全身にノミの群れ。夜は首筋や壁ををゾロゾロと南京虫が列をなし這い回り、生後二カ月の子を守るのに大変でした。

五月三十一日頃から急に息子の衰弱が目立ち容態が急変。元軍医さんが注射をと言われましたが貴重なものだけに、冷たい母のようですが、たとえ一、二本打っていただけでも助からない命なら、何としても日本に連れて帰ってやりたい、またやらねばとは思いましたが、我が子に詫びつつ、お断りしました。それでも奇跡を祈り、周りの方々も心臓マッサージをしてくださいたり、消えゆく小さな命を守ってくださいました。

六月一日未明、眼を閉じていた子が眼を開け、名前を呼ぶと私の方をジーンと見ておりましたが、大きな息と共に帰らぬ子となりました。いたいけな子が、両親の愛も受けられずに僅か三カ月の命を終

わらせてしまったこと、そして主人との約束も守ることができなかつたという悔しい思いで、氷のように冷たくなってゆく我が子を、夜明けまで腕にしっかりと抱きしめていました。死ねるものなら私も一緒にと、ずっと顔を見つめておりました。

仏の御手に抱かれ、旅立ってゆくことを念じ、小さなお棺の中に日の丸の旗で遺体を包み、結婚式の二人の写真を入れて、翌日、埋葬に行ってくださいる方をお願いをしました。

六月中旬、大尉夫人が亡くなられ、日本に帰るまでには是非お墓参りをしたいと思っていましたので、ご遺体に付き添い、日本にお帰りになれなかつた無念を思いご冥福を念じつつ、徒歩一時間半ほどの日本人共同墓地に行きました。小高い山の半分が日本人墓地で、裏側は朝鮮人墓地となっており、道路際まで埋葬されていきました。先に息子を山の頂上に埋めて来たこのことでしたので、見渡す限り木の墓標を我が子の名を呼びながら探し歩き、やっと見つけました。幼子を独り朝鮮の地に残して帰ることの許しを請い、両親と難民

一同が無事帰国できることを見守って欲しいと願ひ、下山しました。

六月下旬、大雨で大同江が氾濫し、社宅が浸水したため、再び対岸の旧酒造会社の室に移動させられました。窓からは人の足のみが見え、薄暗くじめじめとして蒸し暑くてとても暮らせるものではなく、人間麴ができること冗談を言ったりしました。天気の良い晩は外に出て、星座を見ながら、主人や両親や家族は、どこでこの同じ星を見ているのだろうと思うことしきりでした。昼食は近所の豆腐屋から豆腐を買って来て醬油をかけ食べたりしました。

平壤の冬の暖房は、オンドルなので、男の人が石炭の粉を固めて燃料を作る仕事を探して来て、私たち女性も働きに行かせてもらいました。また編み物ができるといふことで、セーターを編ませてもらいました。

八月に入ってから、日本に帰れるかもしれないといふことで、途中の食糧にとボン菓子を用意したり、農家出身の人にわらじ作りを教えてもらい夜は一同わらじ作りをしたりしました。

ある日、使役から帰って来た人が、「叔父さんにあたる軍医さんから、話の中で一緒にいる貴女のことが出て、明日連れて来て欲しいと頼まれた」と言われしました。気にはなっていました。叔父はまだ平壤にいたとは驚きました。徒歩で二時間くらいの鉄条網の囲いの中に日本兵の姿が見え、やがて赤十字の腕章をつけた軍服姿の元気の叔父の姿が現れ、お互いの元気を喜び合いました。

間もなく移動するので、その前に何とか会いたいと思っていた由。チリ紙にお金を包み、何かの時にと食糧品も少々渡され、振り向かないで早く帰るようになわれ、無事戻って来ました。私は本当に幸せ者、この幸せを大切にしなければと、神仏の加護をあらためて感謝しました。

平壤を脱出一路開城へ

遂に脱出する日が来ました。男性三人、女性五人のグループで出発です。ソ連軍に見つかからないよう山中を歩くことになり、途中公安局のパトロール隊に会いましたが、歩く道を教えてもらいました。

一日目は山中で雨に遭い、夜は野宿。足にまめがで  
き、歩き慣れない山道を長時間歩き続けたためにすっ  
かり疲れきり、眠りこんでしまいました。

二日目、痛む足を引きずり、何としても日本に帰る  
のだという気力のみで、通り過ぎる道すがら、地元の人  
に水や食糧品を与えられ、人の心の温かさに勇気づけ  
られました。公安局は黙認しており、駐在所に立ち  
寄るように言われていたので、その夜は駐在所に泊め  
てもらいました。

川なども橋の無い所を胸までつかったり、泳いで渡  
りましたが、四日日ぐらいにソ連兵に見つかり公安局  
へと連行され取り調べを受ける身となりました。全  
員、軍関係と知られないように「満州豚毛会社社員で  
歯ブラシを作っていた」ということになりました。

「日本に帰っても焼け野原で住む家も無いだろうから、  
ソ連で働かないか」と言われましたが断りました。夜  
半過ぎまで全員の取り調べが行われました。やっと男  
性も解放され、食事を与えられ、その夜はそこに泊ま  
り、疲れを癒しました。

だんだんと歩くりズムも覚え、要領もよくなり早め  
に休息を取り、かえって歩くことに楽しみを増してい  
きました。途中で長年熊本にいたという駐在さんに会  
い、「ご苦労じゃな、開城まではもうすぐじゃ。日本  
はいいところじゃった」と励まされ、食糧を持たせてく  
れました。人の心の温かさにすがり、敗戦国民の惨め  
な気持ちも癒され、戦争のばかばかしさ、平和の尊さ  
をひしひしと感じました。

最終日は、日本人の合流地点までトラックで運んで  
もらい、ある程度のまとまった人数で、ソ連軍兵士が  
街に遊びに出る土曜日の晩を選んで、兵舎の前を足早  
に通り過ぎ三十八度線の山へと向かうのです。神仏の  
加護を願って三十八度線を目指して山中に入りました  
が、案内役の朝鮮人にさんざん連れまわされ、途中で  
金品をまきあげられて放り出されました。仕方なく月  
もない真つ暗闇の中を歩き始めましたが、危険なため  
腰を下ろして寝ることにしました。

白々と夜が明け始めた頃、はるか下の方に開城が見  
えるということで、転がるように山道を下り開城にた

どり着きました。これで日本に帰れる、たとえ焼け野原で住む家が無くても、今日までの苦勞を思えばヘイチャラさと思えました。

鉄条網の中のテントの収容所に入りましたが、収容人員六百人ぐらゐの収容所が千人以上になったため、足を伸ばして休むこともできず、食事も一回だけ、それもいつ支給されるかわからない状態でした。日系米兵が絶えず警戒に当たり、何ともいえない変な気持ちでした。二種混合の予防注射をさせられ、二日後に釜山港まで貨車で運ばれ、倉庫で一泊しました。米軍支給の缶詰を珍しがつて食したり、男性数人が糸を垂らして鯖釣りをし、それを食したりしておりました。

リバティ号に乗船し、岸壁を離れた瞬間、誰からもなく拍手、万歳がおこりました。亡き我が子には、必ず迎えに来るから待っていてと叫びました。(十年ぐらゐ前に北鮮に行かれた方の話では、なかなか朝鮮側は墓地に行くことを許可せず、粘ってやっと行ってみたら朝鮮人墓地は残っていたが、日本人墓地は跡形もなくキャンプ場になっており骨の行方を問いただし

ても答えてはくれなかつた由)

船中には色々な人がおり、慰問団の芸能人が芸能会を開いたりしました。日本の島影が見え出すと、誰彼なく抱き合つて無事帰国できたことを喜び、叫び合つておりました。ところが、下船間近になり、釜山港で鯖を釣つて食した人たちが下痢をし始め、一同その人たちの検査結果が出るまで、博多港を目前にしながらか合へと無情にも追いやられました。

一週間経つて、一同の検便も良好で、博多港に無事着き、私の難民生活は終わりを告げました。

京都は空襲にあわなかつた土地でした。駅に降りたつた時、私は発疹熱で丸坊主にされた髪が、やつと二センチくらい生えてきていました。着ている物といつたら、垢だらけのよれよれのモンペ姿に、ズダ袋という恰好でした。京都の人たちは身なりもしゅんとしており、自分がなんとも惨めな姿に思えました。結婚三カ月で写真も届いていないだろうし、果たして主人の実家に訪ねて行つても迎え入れてもらえるだろうか不安でした。それに住所は分かつても道順は分から

ず、途方に暮れて駅前の学徒援護会に入って事情を話したところ、同志社大の女性の方が、幸い知っていたのことで連れて行っていただきました。立派な門構えの家なので入るのに時間がかかりましたが、意を決して、恐る恐る玄関の戸を開け、声をかけたところ、フライパンを持った弟が出て来て、私を見るなり「あっ、姉さんや、姉さんが帰って来たで」と叫びました。その声を聞いたとたん私はへタリこんでしまいました。

ちょうど一週間前に姉がここに訪ねてきて、手紙を置いていたので家族の消息もわかりました。

両親、次兄家族の六人は留用でいまだ奉天に残り、診療に携わっていました。

召集された長兄は復員して東大の医局に復職している由。姉、三兄は壺蘆島から引き揚げ、姉は水戸の夫の実家へ、三兄は東北大医学部に編入。

祖母、叔母は叔父の実家松本の方へ。それぞれが一人も欠けることなく（我が子だけは欠けてしまいました）が無事日本に帰りついたことは何にもましてうれ

しいことでした。

主人と姉の夫はシベリアで抑留生活を送り、奇しくも主人が入院していた病院で、看護士として働いていた姉の夫に再会。主人は二十三年九月に、両親次兄家族は二十三年三月に、姉の夫は二十五年九月、叔父は二十二年頃に無事日本に戻り、我が家の外地での生活に終止符を打ちました。

## わが思い出の地 満州

香川県 那 須 佐紀子

私が初めて満州の土を踏んだのは、敗戦三カ月ほど前のことだった。

昭和二十年の四月、歓呼の声に送られて宇高連絡船の高松栈橋を離れ、第八次蘆屯開拓団にいる両親や妹のもとへ、報国農場隊員の人たちと一緒に渡満した。

それまで私は、高松高等女学校四年生として、香川県より兵庫県鳴尾村にある川西航空機株式会社鳴尾製